

里鑽に就いての協定や西班牙と伊太利間の水銀鑛の協定其の他の如き之である。直接に政府の手に俟たない國際商議は更らに多數に及んでゐる。國際的統制の狀況に就いての詳細は第八章に於いて述べることにしよう。(未完)

新著紹介

O'Fels, E.: Der Mensch als gestalter der Erde.

Bibliographisches Institut A. G. Leipzig

1935 202s.

本書の紹介及び其の批評は既に地理學評論第十一卷第八號に於て辻村助教によつてなされてゐるが、筆者も最近本書を通讀してその内容に興味を感じたので、借越乍ら再度の紹介・批評を「地球」誌上で行つて見たいと思ふ。

經濟地理學の方法として交互(交替)作用の理論は我が國の經濟地理學者に採用せられてゐるのであるが、この理論を具體的に展開する場合には經濟人に對する自然の影響は述べられてゐても、經濟人による自然の變改に關してゐる書物は殆ど見當らない。それ等の書物は經濟人に對する自然の影響及び經濟對象と經濟狀態の分布の敘述並びにその基礎附けだけ

で終つてゐる。かうした事情は後述する如く獨逸に於ても同様であつて、フェルスは緒言で述べてゐる如くこの缺陷を補ふことを以て本書の目的としてゐる。この意味に於て本書を再び紹介することは決して無意義でないと思ふので以下少しの内容を記して見よう。勿論この書物には所々現在の獨逸に於ける社會狀態の反映が見られるのであつて、さうした點は尙注意と判斷が必要であらう。

フェルスは緒言に於て彼が何故かゝる問題を對象として取扱つたかその理由を先づ述べてゐる。彼は經濟地理學の課題をリヒトゲンズ(Richtgenz)其の他の人々に從つて「充填された土地空間と經濟人との間の交互作用を観察し、説明することに在る。」と考へた。従つて經濟地理學的研究並びに理論の主領域として次の三が擧げられる。即ち

- 一、經濟人に對する自然の影響
- 二、經濟對象と經濟狀態の分布の敘述と其の基礎附け
- 三、經濟人による自然の變改

それにも拘らず經濟人による自然の變改の敘述はひどく等閑視されてゐる。その理由はフェルスによれば「先づ第一に經濟地理學の科學としての成立が新しいことであり、次には材料の蒐集の困難なことである。」材料の蒐集難はそれが廣く散在的に非常に異つた學問の領域に於て見出されることにも依る。又多くの反作用は認識し難く、却つて或る對象を深く研究して始めて明かにされる場合のあることも顧慮され

なければならぬ。我々は無意識的に經濟地域 (Wirtschaftslandschaft) を何か自然的に與へられたものとして觀察してゐる。クローイツルブルグ (Greutzburg, N.: Kultur im Spiegel der Landschaft, Biederthas Leipzig 1930 S.V) の述べてゐる如く「地域は……人間が居住し、人間にとつて關係の深い環境となるので我々は地域に就いて何處にその本質的な特色が基礎を置いてゐるかと云ふことに關してあまり考へずに何か既に出來上つて與へられたものとして觀察することを強いられる。」ことが一層その認識を困難にしてゐる。

併しフェルスは自然に對する經濟人の反作用の敘述が極めて貧弱で、經濟地理學研究の重要な課題に屬せしむる資格を現在では有しないことを認めつゝも、尙經濟人による自然と生物界の變改の敘述と批判は經濟地理學概論に於て人間及びその經濟に對する自然の影響とその價値に於ては同等であることを強く主張してゐる。勿論地表上に於ける人間の作用は非常に大きな範圍と錯綜した多面性を有してゐるから、この課題を充分満足させることの困難なのは明かである。

しからばフェルスは經濟人による自然の變改を如何に敘述して行つたであらうか。彼は本書に於て經濟と交通の影響をそれ／＼獨立の編に引離してゐる。彼はその理由として、一、比較的大きな概観性を得る爲と、二、交通地理學は獨立の部門として經濟地理學と對等の位置に置かれると云ふ二つを擧げてゐる。その場合彼は經濟的な影響が只交通手段によ

つてのみ成立する故この兩者を引き離すことの困難さを充分認めてゐるのである。

それで最初の編では自然地域と生物界に於ける經濟の影響を述べて居り、この編は全體の四分之三を占めて本書の最も重要な部分を占めてゐる。其處では氣候・地形・水・植物界・動物界・人間それぞれ自身に對して及ぼした經濟の影響が順々に敘述されてゐる。次の編は自然地域と生物界に於ける交通の影響を取扱つてゐるが、その内容は貧弱で僅か四十餘頁を費してゐるに過ぎない。陸地の變改・水に於ける交通の作用・植物界への影響・動物界への影響・交通と人との關係が夫々簡単に記されてゐる。

頁數の制限から此處ではその各々に就いてたとへ僅かでも述べる餘裕すらない。併し引用されてゐる事實の中には既に辻村助教によつても一部分紹介されてゐるが多くの興味を惹くものが存在する。此處では只植物界と經濟人との關係を取扱つた章の中で最後の經濟地域 (Wirtschaftslandschaft) と經濟形式 (Wirtschaftsformation) を説明した部分のみを簡単に紹介することに止どめ、より詳細な紹介は後日の機會に譲り度いと思ふ。

筆者が此處で特にその部分を選んで紹介するのは交互作用の理論を經濟地理學の核心であると考へてゐるフェルスが經濟地域の問題を如何取扱つてゐるかと云ふ點を明かにする爲である。彼は自然地域に對する經濟地域を認め、その移行が

漸次的であるにも拘らず經濟地域は相互に區別され、特定の經濟形態をもつてゐることを指摘し、そして單一な經濟形態をもつ經濟地域の部分を經濟形式として現はした。併し此の場合經濟地域の總括的・一般的な叙述は尙基礎が缺けてゐるとの理由で與へられてゐない。彼は經濟地理學的形態が到る處變化してゐるがそれは人間が如何にその自然的な條件と妥協し、それに適合し、或はそれに打克つたかと云ふことできまるとしてゐる。勿論この條件は彼によれば人間の文化が高い程度ものになればなる程變化を受けるのである。而して彼は無数の異つた經濟形式を叙述し、説明し、順序を立て、配列し、それを經濟地域の全體相にまで組合せることは經濟地理學者の課題であると同時に地理學者の課題でもあると考へて居り、經濟地理學者は只經濟地域の現在の相を示すことのみで満足せず、その發展を把握せねばならぬと言つてゐる。併し乍ら、彼は何ら具體的なものを示さず、經濟地域は解決さるべき最大の問題を地理學者に提示してゐるが、尙その初期の段階にあり、經濟形式の基礎單元を取扱つた勞作も比較的少いが經濟地域の全體性の把握に就いては更にその數も少く、經濟地域の地理學概論の目的が達せられる迄には尙多くの努力を要するであらうとだけ述べてこの章を終へてゐる。

本書は既に述べた如く交互作用の理論に據る經濟地理書に於て當然その主要な叙述の對象となるべき「經濟人による自然の變改」の問題が等閑視されてゐることからそれを補ふ目的で書かれたものである。在來の經濟地理書がその理論に於てはともかくとして、具體的な事實を述べるに當つては經濟事實の分布とそれに對する自然の制約のみの叙述に限られ、意識的にせよ、無意識的にせよ環境論の捕虜となつてゐるものに對してかうした方面の研究は非常な意義を持つてゐるものと考へられる。即ち上述の如く我々は經濟地域を無意識的に何か自然的に與へられたもの、出来上つたものとして觀察し勝ちであるからである。併しフェルスの述べてゐる交互作用は經濟人と自然を對立させ乍ら、それに於て云ふ所の經濟人は一定の社會的發展段階の人間であることが明瞭に意識されて居らず、従つてその自然との關係も生産力の發展水準と所與の社會的構成を特徴付ける生産關係とに關聯して述べられて居ない點で尙物足りぬ點が感じられる。

フェルスが經濟地域の問題は地理學者によつて解決さるべき最大の問題であり、經濟地域の地理學概論の完成迄には尙多くの努力を要することを述べてゐる點は同感であるが、この問題に於て交互作用の理論が如何展開されるべきかに就いてもつと突込んだ説明が欲しいと思ふ。

この書物は一つの礎石として書かれたものであり、彼自身も組織的に秩序立てられた叙述にそれ／＼適當な實例を挿入する余てが極めて不完全に終つたことを言つてゐる。併しその資料を多くの科學部門に亘つて探す場合にはその選擇に際して或る程度の偶然的働くのは止むを得ぬことであらう。又

彼がその實例の多くを歐洲殊に獨逸に求めたこともそれ等の地域に就いての知識が豊富であり、書物の入手の容易なことから首肯出来る。今後はこの方面で各國の學者の協力が必要であらう。尙其の他叙述に首尾一貫して居らぬ場所もあつたりするが、取扱はれてゐる事實だけでも我々に耳新しいことも多く、一讀する價值のある書物であると思はれる。(安藤)

○日本城廓史

大類 伸・鳥羽正雄 共著

雄山閣版 定價 六圓

菊版七三二頁の大冊で序説には城廓史の意義をのべ日本城廓史の時代區分を明にし第一篇上世の築城では大化以前のチヤシ・神籠石をのべ大化以後東北經略の柵址と九州邊防をしるし第二篇中世の築城では軍制と戰爭の發展、建武中興以後諸國の築城をしるし、第三篇近世の築城として安土・桃山・江戸時代の城廓と種類をあげ、安土から大阪、大阪から江戸その他現存せる我國建築上の花形である多くの名城を綜覽して研究剩す處なく、第四篇最近世の築城では兵器の改良と西洋築城の影響を明にしたものであつて附圖四百七十三の多きに達し説明誠に懇切を極めて一わたり我國の城廓についてその發達の概念をうるにこの上ない良著である。(藤川)

○日本工業發展論

高橋龜吉著 千倉書房

定價 二圓

菊版四百七十頁の大冊であるが第六回太平洋會議に(昭和十一年八月)於て日本工業の最近の發展飛躍の原因を説明し

日本商品に對する壓迫を排除し外人の誤れる觀念を是正せんがために執筆された原稿を第一篇とし第二篇は日本工業發展の具體的探相をしめたものである。

第一日本最近工業の發達を齎らせる諸事情のうちでは、圓爲替の低落位ではなく、後進國としての優點のあることを力説し中小工業者の優勢の事由と其意義を明にし人口過剰なために、農村の労働條件が低位である、従つて工業界への新人がたえず集中して愈低廉な労働をやる理由をのべ、最近に於ける日本工業發展の内容として重工業と化學工業の勃興をのべ、日本經濟の發展が世界を震撼しつつある真相と題して、日支の將來に關する英米兩國の注意を詳述し非常時に於ける世界の大勢を知らんとする人士の參考に供されてゐる、果して日本の工業がこの點まで躍進したと自惚れてはどうかと考へるけれども、取敢ず、ヨセミテの太平洋會議と其以後について、我等は本書から多くの教示をうけるであらう。(藤川)

○日本の現勢

青木利三郎著 啓明會出版

定價 五十錢

財團法人啓明會は本年も種々の書籍を出したが、本書も亦その一つで、青木氏の調査を昭和十一年の八月に出版したもので、我國の國情・産業貿易・交通運輸・教育・美術文藝・社會事業等について極め簡明に大體を明述したものである。別段新しい見解があるのではないが、市政年鑑・商工統計・國勢圖繪等から克明に集めてこの小冊子が出来た、本書によ

つて大體の國勢がわかれば、著者も出版者も共によるこぶであらうと思ふ。(藤田)

○揚子江上流地方調査日誌及線路圖

山田邦彦著 地學協會發行
非賣品

明治三十五年から七年にかけて支那揚子江上流地方泗川・雲南・貴州及び川邊特別地域の地質礦物の調査に出張した京都帝國大學工學部山田邦彦氏の遺稿で菊版百六十版にわたる旅行日記と九十二頁にわたる倍數の寫眞集と併せて博士がつた路上の地圖の三部を集めて出された。行文も流暢であるしいろ／＼珍らしい風俗人情なども書いてあつて、地質探査の科學者の日記としては蓋し出色のものであらう。博士の在りし日の風手をしのび、本書の出來たことを全博士未亡人にお喜び申し上げる。(藤田)

○大東輿地圖

奎章閣著書

朝鮮古山子の地圖で李太王元年及び哲宗二十年に刊行されたものを今般京城大學法學部から出版したものである。別冊索引つきで地圖は映入二十二層に分割した方格圖である。本圖は實に東洋地圖學の一つの結果で晉斐秀の地圖論をのべその術に従つたもの一つで、山脈や水脈などが、朝鮮特殊の圖法となつてゐるので参考に供して面白い。筆者が特に面白く感じたことは本圖第二十行で南海郡の南の草島に倭といふ注記のあることである。この島は入唐求法巡禮行記に丘草島

と記され、慈覺大師がこゝへ歸つてきたとき、日本對島の漁夫が六人まで、この島で囚はれてゐたと記されてゐる島である。後世宗實錄には對馬の宗氏から毎年六七十艘の對馬の漁船がゆくので孤草島を借りたといふと申出でたとあるところ、三浦周行先生の「日本史の研究」に孤草島は所在不明とあるが孤草島は即ち丘草島で、入唐巡禮行記の一本には草島と記されてゐる位で最初から名は草島である。この圖で南海郡の南に草嶼と草島といふ二つあるが二つとも倭人の出漁地であつたらしい。(藤田)

雜報

○馬來半島ケランタン州

ケランタン州は馬來半島の中央東岸に位し北緯四度と六度の間、東經百一度から百二度半の間にあつて東に南支那海及びトレガヌ州に接し、南はパハン州、西はペラク州に境し全面積五千七百五十平方哩、首府コタバルはケランタン河の河口から六哩の地にあつて慶長元和の頃御朱印船の渡航した太泥國はその北方である。東西洋考卷九をみると、Palo Condore 即ち崑崙より坤申及庚酉針三十更取^{ケランタン}吉蘭丹とあり吉蘭丹即太泥港口用坤申七更入港は大泥國と記されてゐる位だから山田長政時代に日本の船もこのケランタン州コタバル港などへは進航したと考へられる。こゝは人口一萬五千位である、氣候概して溫度の差少く